

Thomas Grano: *Control and Restructuring*

Oxford: Oxford University Press, 2015. xi + 244pp.

中川 聡

1. はじめに

本書は言語研究における中心的テーマであるコントロールと再構成 (restructuring) に焦点を当てている。コントロールに関する先行研究ではコントローラーとPROの意味解釈の関係が念頭に置かれている。コントロールはコントローラーがPROの指示対象と完全に一致する包括的コントロール (exhaustive control, 以下EC) と、PROの指示対象の一部に含まれる部分的コントロール (partial control, 以下PC) に大別され、本書もこの区別に従っている。一方、再構成はイタリア語やドイツ語などで観察され、本書では一見すると二重節構造 (biclausal structure) に思われる構造が、節境界を越えないで適用される統語操作に対して透明な領域 (単節構造 (monoclausal structure)) を構成している現象と定義されている。先行研究ではECでは再構成が観察され、PCではそれが観察されないというコントロールと再構成の関係が示唆されているが、本格的な統語分析はなされていない。このような背景を踏まえ、本書はコントロールと再構成の关系到理論的説明を与えることを目的としている。

本書の構成は以下の通りである。2章ではEC述語は単節構造、PC述語は二重節構造を伴うという提案がなされている。3章では2章の提案に基づいて、どのような述語が再構成が観察される不定詞補部を選択するのが説明されている。4章ではPC述語であるが、例外的に再構成が観察される *want* について

議論されている。5章では不定詞補部が表わす主節の時間に対する同時性、先行性、後行性という意味解釈がEC述語とPC述語に選択された場合で異なるという意味論的事実が、単節構造と二重節構造の違いに基づいて説明されている。6章では通言語的観点からの考察がなされ、中国語やギリシア語のコントロール補部も単節構造と二重節構造の2種類に大別されることが示されている。紙面の都合上、以下では本書の主要な提案がなされている2章と3章の概要をまとめる。

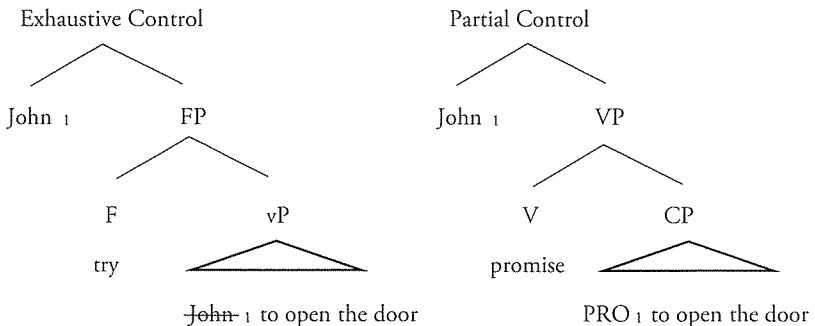
2. コントロールと再構成

コントロールと再構成の関係については、先行研究により(1)の記述的一般化がなされている。

- (1) Exhaustive control predicates are restructuring predicates; partial control predicates are non-restructuring predicates.

この一般化は、再構成が起きている証拠(イタリア語の接語上昇(clitic climbing)やドイツ語の長距離受動化(long passive))が相動詞、含意動詞のようなEC述語では観察されるが、叙実動詞のようなPC述語では観察されないという通言語的観点からの考察に基づいている。本書では(1)に対して(2)の構造が提案されている。

- (2)



EC述語は機能語であり、vPを補部を選択している。この機能範疇はCinque

(2006) で提案されている機能範疇の階層に含まれている当該述語の意味に対応するものである。さらに、Hornstein (1999) のコントロールに対する移動分析を援用し、不定詞の主語が主節へ繰り上がると分析している。この結果、ECの解釈が得られ、この場合には再構成が観察される単節構造であることが説明されている。一方、PC述語の補部はPRO主語を伴うCP構造と提案され、再構成が観察されない二重節構造であることが説明されている。

3. 述語の意味と再構成

本書の3章では、2章の提案に基づいて再構成が観察される述語に関する(3)の仮説に理論的説明が与えられている。

(3) Restructuring hypothesis (Revised)

A verb V restructures just in case the meaning of V is subsumed by the meaning of an inflectional-layer functional category below Tense.

(3) は Cinque (2006) で提案されている機能範疇の階層において、Tの下位にある機能範疇の意味に対応する述語、すなわちEC述語、では再構成が観察されることを述べた仮説である。この仮説を説明するためにEC述語の意味論に焦点が当てられている。EC述語はその主語が不定詞補部から繰り上がるが、(4)のように虚辞主語と共起しないことから不定詞補部に対して主語コントロール解釈を要求する主語志向的述語 (subject-oriented predicate) ということが示されている。

(4) *There tried to be a problem.

(4) に対して、EC述語は(5)のようにその意味論の一部に変項としての個体項 (individual argument) を含んでおり、その個体項 ((5b) で (Xdep (endant)) と表記されている) が [Spec, TP] へ移動した主語に束縛されることで主語志向的解釈が生じると分析されている。

(5) a. John tried to go

b. [_{TP} John [_T [_{AspP} [_{Asp} try (Xdep) [_{VP} John to go]]]]]

この個体項の束縛という観点からの分析に基づいて、(3)の仮説は以下のよ

うに説明される。すなわち、*try*のような Cinque (2006) の機能範疇の階層においてTの下位にある機能主要部を占める主語志向述語の場合は、(5b)のように不定詞の主語が主節の[Spec, TP]へ繰り上がり、その述語に含まれる変項としての個体項を束縛することにより、主語志向の解釈が生じる。したがって、このような述語は単節構造を伴い、再構成が観察される。

また、主語志向的述語は全てEC述語に分類されるわけではないということも論じられている。例えば *claim* のようなTの上位にある機能主要部に対応する意味を持つ主語志向述語 (*claim* は $\text{Mod}_{\text{speech act}}$ に対応する) は、もし、その機能主要部として派生に入ってしまうと、[Spec, TP]に位置する主語より高い位置にあるので、その述語に含まれる変項としての個体項が主語に束縛されず、派生は破綻してしまうことになる。このため、このような述語は機能的要素としてではなくVとして派生に入り、PROを主語とするCP不定詞補部を選択することで主語コントロール構造が派生されると分析されている。したがって、Tの上位にある機能主要部に対応する意味を持つ主語志向述語は二重節構造を伴い、再構成が観察されないPC述語と分析され、この観点からも(3)の仮説に説明が与えられることになる。

4. 評価と展望

本書の独創的な提案は、EC述語は単節構造を伴い、PC述語は二重節構造を伴うというように両者の構造を区別することである。この提案によりこれまで記述の一般化であったコントロールと再構成の関係や、再構成が観察される述語に関する仮説に理論的説明を与えた点で本書は高く評価されるべきと思われる。また、この提案は5章、6章、7章で意味論的、通言語的観点から支持されることも示されており、コントロールと再構成に関して多岐にわたる言語事実を説明しうる分析と判断される。

一方で、本書の提案にはいくつかの問題が残っている。例えば、*try* や *manage* などのEC述語は機能語として分析されているが、本動詞のように屈折する点や *do* 支持を受ける点についての説明が不十分であるように思われる。またEC

述語は不定詞だけでなく名詞を補部に選択することもあるが、この点は全く考察されていない。仮に不定詞を選択する場合に機能主要部を占め、名詞を選択する場合はVを占めると仮定しても、今度はどのような経緯でEC述語が機能語として再分析されたのかが問題になる。また、不定詞をvPと分析する際に生じる *to* の統語的ステータスについての問題にも明確な答えが提示されていない。さらに、3章での述語の意味論の一部としての個体項を主語が束縛するという分析においても、どのような統語操作が関与しているのか言及されていないため不明瞭さが残っている。核となる提案にこのような問題が残っているため、本書の分析にはさらなる検討の必要性があることは否めない。

このような問題はあるが、本書の提案はコントロールと再構成の統語論的、意味論的関係を説明する新たな方向性を示し、コントロールと再構成の関係をさらに探求するための礎石になる可能性を秘めていると感じられる。本書が今後の理論言語学研究の発展に大きく貢献することを願う。

参考文献

- Cinque, Guglielmo. 2006. *Restructuring and Functional Heads*. Oxford, Oxford University Press.
- Hornstein, Nobert. 1999. Movement and Control. *Linguistic Inquiry* 30, 69–96.